杜松の樹

グリム

中島孤島訳

青空文庫

むかしむかし 大昔、今から二千年も前のこと、一人の金持ちがあって、美くしい、気立の善い、おかみさんを持って居ました。この夫婦は大層仲が好かったが、小児がないので、どうかして一人ほしいと思い、おかみさんは、夜も、昼も、一心に、小児の授かりますようにと祈っておりましたが、どうしても出来ませんでした。

さてこの夫婦の家の前の庭に、一本の杜松がありました。或る日、冬のことでしたが、おかみさんはこの樹の下で、林檎の皮を剥いていました。剥いてゆくうちに、指を切ったので、雪の上へ血がたれました。（＊（註）杜松は檜類の喬木で、一に「ねず」又は「むろ」ともいいます）

「ああ、」と女は深い嘆息を吐いて、目の前の血を眺めているうちに、急に心細くなって、こう言った。「血のように赤く、雪のように白い小児が、ひとりあったらねい！」

言ってしまうと、女の胸は急に軽くなりました。そして確かに自分の願がとどいたような気がしました。女は家へ入りました。それから一月経つと、雪が消えました。二月すると、色々な物が青くなりました。三月すると、地の中から花が咲きました。四月すると、木々の梢が青葉に包まれ、枝と枝が重なり合って、小鳥は森に narrow を起こして、木の上の花を散らすくらいに、歌い出しました。五月経った時に、おかみさんは、杜松の樹の下へ行きましたが、杜松の甘い香気を嚊ぐと、胸の底が躍り立つような気がして来て、嬉しさに我しらずそこへ膝を突きました。六月目が過ぎると、杜松の実は堅く、肉づいて来ましたが、女はただ静として居ました。七月になると、女は杜松の実を落して、しきりに食べました。するとだんだん気が ふさいで、病気になりました。それから八月経った時に、女は夫の所へ行って、泣きながら、こう言いました。

「もしかわたしが死んだら、あの杜松の根元へ埋めて下さいね。」

これですっかり安心して、嬉しそうにしているうちに、九月が過ぎて、十月目になって、女は雪のように白く、血のように赤い小児を生みました。それを見ると、女はあんまり喜んで、とうとう死んでしまいました。

夫は女を杜松の根元へ埋めました。そしてその時には、大変に泣きましたが、時が経つと、悲みもだんだん薄くなりました。それから暫くすると、男はすっかり諦めて、泣くのをやめました。それから暫くして、男は別なおかみさんをもらいました。

二度目のおかみさんには、女の子が生まれました。初のおかみさんの子は、血のように赤く、雪のように白い男の子でした。おかみさんは自分の娘を見ると、可愛くって、可愛くって、たまらないほどでしたが、この小さな男の子を見るたんびに、いやな気持になりました。どうかして夫の財産を残らず自分の娘にやりたいものだが、それには、この男の子が邪魔になる、というような考えが、始終女の心をはなれませんでした。それでおかみさんは、だんだん鬼のような心になって、いつもこの子を目の敵にして、打ったり、敲いたり、家中を追廻したりするので、かわいそうな小児は、始終びくびくして、学校から帰っても、家にはおちついていられないくらいでした。

或る時、おかみさんが、二階の小部屋へはいっていると、女の子もついて来て、こう言いました。

「母さん、林檎を頂戴。」

「あいよ。」とおかあさんが言って、函の中から美麗な林檎を出して、女の子にやりました。その函には大きな、重い蓋と頑固な鉄の錠が、ついていました。

「母さん、」と女の子が言った。「兄さんにも、一つあげないこと？」

おかあさんは機嫌をわるくしたが、それでも何気なしに、こういいました。

「あいよ、学校から帰って来たらね。」

そして男の子が帰って来るのを窓から見ると、急に悪魔が心の中へはいってでも来たように、女の子の持っている林檎をひったくって、

「兄さんより先に食べるんじゃない。」

と言いながら、林檎を函の中へ投込んで、蓋をしてしまいました。

そこへ男の子が帰って来て、扉の所まで来ると、悪魔のついた継母は、わざと優しい声で、

「坊や、林檎をあげようか？」といって、じろりと男の子の顔を見ました。

「母さん、」と男の子が言った。「何て顔してるの！　ええ、林檎を下さい。」

「じゃア、一しょにおいで！」といって、継母は部屋へはいって、函の蓋を持上げながら、「さア自分で一個お取りなさい。」

こういわれて、男の子が函の中へ頭を突込んだ途端に、ガタンと蓋を落したので、小児の頭はころりととれて、赤い林檎の中へ落ちました。それを見ると、継母は急に恐ろしくなって、「どうしたら、脱れられるだろう？」と思いました。そこで継母は、自分の居室にある箪笥のところに行って、手近の抽斗から、白い手巾を出して来て、頭を頸に密着けた上を、ぐるぐると巻いて、傷の分らないようにし、そして手へ林檎を持たせて、男の子を入口の椅子の上へ坐らせておきました。

間もなく、女の子のマリちゃんが、今ちょうど、台所で、炉の前に立って、沸立った鍋をかき廻しているお母さんのそばへ来ました。

「母さん、」とマリちゃんが言った。「兄さんは扉の前に坐って、真白なお顔をして、林檎を手に持っているのよ。わたしがその林檎を頂戴と言っても、何とも言わないんですもの、わたし怖くなッちゃったわ！」

「もう一遍行ってごらん。」とお母さんが言った。「そして返事をしなかったら、横面を張っておやり。」

そこでマリちゃんは又行って、

「兄さん、その林檎を頂戴。」

といいましたが、兄さんは何とも言わないので、女の子が横面を張ると、頭がころりと落ちました。それを見ると、女の子は恐くなって、泣き出しました。そして泣きながら、お母さんの所へ駈けて行って、こう言いました。

「ねえ、母さん！　わたし兄さんの頭を打って、落しちまったの！」

そう言って、女の子は泣いて、泣いて、いつまでもだまりませんでした。

「マリちゃん！」とお母さんが言った。「お前、何でそんなことをしたの！　まア、いいから、黙って、誰にも知れないようにしておいでなさいよ。出来ちまったことは、もう取返しがつかないんだか

らね。あの子はスープにでもしちまいましょうよ。」

こういって、お母さんは小さな男の子を持って来て、ばらばらに切りはなして、お鍋へぶちこんで、ぐつぐつ煮てスープをこしらえました。マリちゃんはそのそばで、泣いて、泣いて、泣きとおしましたが、涙はみんなお鍋のなかへ落ちて、その上塩をいれなくてもいくらいでした。お父さんが帰って来て、食卓の前へ坐ると、

「あの子は何処へ行ったの?」と尋ねました。

すると母親は、大きな、大きな、お皿へ黒いスープを盛って、運んで来ました。マリちゃんはまだ悲しくって、頭もあげずに、おいおい泣いていました。すると父親は、もう一度、

「あの子は何処へ行ったの?」ときました。

「ねえ、」とお母さんが言った。「あの子は田舎へ行きましたの、ミュッテンの大伯父さんのとこへ、暫く泊って来るんですって。」

「何しに行ったんだい?」とお父さんが言った。「おれにことわりもしないで!」

「ええ、何ですか、大へん行きたがって、わたしに、六週間だけ、泊りにやってくれッて言いますの。先方へ行けばきっと大切にされますよ。」

「ああ、」とお父さんが言った。「それは本当に困ったね。全体、おれに黙って行くなんてことはありやしない。」

そう言って、食事を初めながら、お父さんはまた、

「マリちゃん、何を泣くの?」とききました。「兄さんは今にきっと帰って来るよ。」

それから、おかみさんの方を見て、

「おい、母さん、これはとても旨いぞ!、もっともらおう!」といったが、食べれば食べる程、いくらでも食べられるので、「もっとくれ! 残すのは惜しい、おれが一人でいただいちまおうよ。」といいながら、とうとう一人で、みんな食べてしまって、骨を食卓の下へ投げました。

するとマリちゃんは、自分の箪笥へ行って、一番下の抽斗から、一番上等の絹の手巾を出して来て、食卓の下の骨を、一つ残らず拾い上げて、手巾へ包み、泣きながら、戸外へ持って行きました。マリちゃんはその骨を杜松の樹の根元の草の中へ置くと、急に胸が軽くなって、もう涙が出なくなりました。

その時、杜松の樹がザワザワと動き出して、枝と枝が、まるで手を拍って喜んでいるように、着いたり、離れたり、しました。すると木の中から、雲が立ちのぼり、その雲の真中で、ぱっと火が燃え立ったと思うと、火の中から、美くしい鳥が飛び出して、善い声をして歌いながら、中空高く舞いのぼりました。

鳥が飛んで行ってしまうと、杜松の木は又元の通りになりましたが、手巾は骨と一しょに何処へか消えてしまいました。マリちゃんは、すっかり胸が軽くなって、兄さんがまだ生きてでもいるような心持がして、嬉しくってたまらなかったので、機嫌よく家へ入って、夕ご飯を食べました。

ところが、鳥は飛んで行って、金工の家根へ棲まって、こう歌い出しました。

「母さんが、わたしを殺した、
父さんが、わたしを食べた、
妹のマリちゃんが、
わたしの骨をのこらず拾って、

手巾に包んで、
杜松の樹の根元へ置いた。

キーウィット、キーウィット、何と、綺麗な鳥でしょう！」

金工は仕事場へ坐って、黄金の鎖を造っていましたが、家根の上で歌っている鳥の声を聞くと、いい声だと思って、立上って見に来ました。けれども閾を跨ぐ時に、片方の上沓が脱げたので、片足には、上沓を穿き、片足は、沓下だけで、前垂を掛け、片手には、黄金の鎖、片手には、ヤットコを持って、街の中へ跳出しました。そして日光の中へ立って、鳥を眺めて居ました。

「鳥や、」と金工が言った。「何て好い声で歌うんだ。もう一度、あの歌を歌って見な。」

「いえいえ、」と鳥が言った。「ただじゃア、二度は、歌いません。それとも、その黄金の鎖を下さるなら、もう一度、歌いましょう。」

「よしきた、」と金工が言った。「それ黄金の鎖をやる。さア、もう一度、歌って見な。」

それを聞くと、鳥は降りて来て、右の趾で黄金の鎖を受取り、金工のすぐ前へ棲って、歌いました。

「母さんが、わたしを殺した、
父さんが、わたしを食べた、
妹のマリちゃんが、
わたしの骨をのこらず拾って、
手巾に包んで、
杜松の樹の根元へ置いた。

キーウィット、キーウィット、何と、綺麗な鳥でしょう！」

歌ってしまうと、鳥は靴屋の店へ飛んで行き、家根の上へ棲まって、歌いました。

「母さんが、わたしを殺した、
父さんが、わたしを食べた、
妹のマリちゃんが、
わたしの骨をのこらず拾って、
手巾に包んで、
杜松の樹の根元へ置いた。

キーウィット、キーウィット、何と、綺麗な鳥でしょう！」

靴屋はこれを聞くと、襯衣のまんまで、戸外へ駈出して、眼の上へ手を翳して、家根の上を眺めました。

「鳥や、」と靴屋が言った。「何て好い声で歌うんだ！」

そう言って、家の中へ声をかけました。

「女房や、ちょいと来なよ、鳥が居るから。ちょいとあの鳥を見な！　いい声でうたうから。」

それから娘だの、子供たちだの、職人だの、小僧だの、女中だのを呼びましたので、みんな往来へ出て、鳥を眺めました。鳥は赤と緑の羽をして、咽のまわりには、黄金を纏い、二つの眼を星のようにきらきら光らせておりました。それはほんとうに美事なものでした。

「鳥や、」と靴屋が言った。「もう一度、あの歌を歌って見な。」

「いえいえ、」と鳥が言った。「ただじゃア、二度は、歌いません。それとも何かくれますか。」

「女房や、」と靴屋が言った。「店へ行って、一番上の棚に、赤靴が一足あるから、あれを持って来な。」

そこで、おかみさんは行って、その靴を持って来ました。

「さア、鳥や、」と靴屋が言った。「もう一度、あの歌を歌って見な。」

すると鳥はおりて来て、左の爪で靴を受取ると、又家根へ飛んで行って、歌い出しました。

「母さんが、わたしを殺した、
父さんが、わたしを食べた、
妹のマリちゃんが、
わたしの骨をのこらず拾って、
手巾に包んで、
杜松の樹の根元へ置いた。

キーウィット、キーウィット、何と、綺麗な鳥でしょう！」

歌ってしまうと、鳥はまた飛んで行きました。右の趾には鎖を持ち、左の爪に靴を持って、水車小舎の方へ飛んで行きました。

水車は、「カタン―コトン、カタン―コトン、カタン―コトン。」と廻っていました。小舎の中には、二十人の粉ひき男が、臼の目を刻って居ました。

「カタン―コトン、カタン―コトン、カタン―コトン」と水車の廻る間に、粉ひき男は、「コツ、コツ、コツ、コツ、コツ」と臼の目を刻って居た。

鳥は水車小舎の前にある菩提樹の上へ棲って、歌い出しました。

「母さんが、わたしを殺した、」

と歌うと、一人が耳を立てました。

「父さんが、わたしを食べた、」

と言うと、また二人が耳を立てて、聞き入りました。

「妹のマリちゃんが、」

と歌うと、また四人が耳を立てました。

「わたしの骨をのこらず拾って、
手巾に包んで、」

と言った時には、臼を刻っている者は、八人ぎりになりました。

「杜松の樹の」

と歌うと、もう五人ぎりになりました。

「根元へ置いた。」

と言うと、もう一人ぎりになりました。

「キーウィット、キーウィット、何と、綺麗な鳥でしょう！」

と歌うと、その一人も、とうとう仕事を止めました。そしてこの男は、最後だけしか聞かなかった。

「鳥や、」とその男が言った。「何て好い声で歌うんだ！　おれにも、初から聞かしてくれ。もう一遍、歌ってくれ。」

「いやいや、」と鳥が言った。「ただじゃア、二度は、歌いません。それとも、その石臼を下さるなら、もう一度、歌いましょう。」

「いかにも、」とその男が言った。「これがおれ一人の物だったら、お前にやるんだがなア。」

「いいとも、」と他の者が言った。「もう一遍、歌うなら、やってもいいよ。」

すると鳥は降りて来たので、二十人の粉ひき男は、総がかりで、

「ヨイショ、ヨイショ！」と棒でもって石臼を高く挙げました。鳥は真中の孔へ頭を突込んで、まるでカラーのように、石臼を頸へはめ、又木の上へ飛上って、歌い出しました。

「母さんが、わたしを殺した、
父さんが、わたしを食べた、

妹のマリちゃんが、
わたしの骨をのこらず拾って、
手巾に包んで、
杜松の樹の根元へ置いた。

キーウィット、キーウィット、何と、綺麗な鳥でしょう！」

歌ってしまうと、鳥は羽を拡げて、右の趾には、鎖を持ち、左の爪には、靴を持ち、頸のまわりには、石臼をはめて、お父さんの家の方へ飛んで行きました。

居間の中では、お父さんとお母さんとマリちゃんが、食卓の前に坐っていました。その時、お父さんはこう言いました。

「おれは胸が軽くなったようで、大変好い気持だ！」

「否、」とお母さんが言った。「わたしは胸がどきどきして、まるで暴風でも来る前のようですわ。」

けれどもマリちゃんはじっと坐って、泣いていました。すると鳥が飛んで来て、家根の上へ棲った。

「ああ、」とお父さんが言った。「おれは嬉しくって、仕方がない。まるでこう、日がぱーッと射してでも居るような気持だ。まるで久しく逢わない友達にでも逢う前のようだ。」

「否、」とお母さんが言った。「わたしは胸が苦しくって、歯がガチガチする。それで脈の中では、火が燃えているようですわ。」

そういって、おかみさんは衣服の胸を、ぐいぐいとひろげました。

マリちゃんは隅ッこへ坐って、お皿を膝の上へおいて、泣いていたが、前にあるお皿は、涙で一ぱいになるくらいでした。

その時、鳥は杜松の木へ棲まって、歌い出しました。

「母さんが、わたしを殺した、
母親は耳を塞ぎ、眼を隠して、見たり、聞いたり、しないようにしていたが、それでも、耳の中では、恐ろしい暴風の音が響き、眼の中では、まるで電光のように、燃えたり、光ったりしていました。

「父さんが、わたしを食べた、」

「おお、母さんや、」とお父さんが言った。「あすこに、綺麗な鳥が、好い声で鳴いているよ。日がぽかぽかと射して、何もかも、肉桂のような甘い香気がする。」

「妹のマリちゃんが、」

と歌うと、マリちゃんは急に顔をあげて、泣くのをやめました。お父さんは

「おれはそばへ行って、あの鳥を、ようく見て来る。」というと、「あれ、およしなさいよ！」とおかみさんが言った。「わたしはまるで家じゅうに火がついて、ぐらぐらゆすぶれてるような気がするわ。」

けれどもお父さんは出て行って、鳥を眺めました。

「わたしの骨をのこらず拾って、
手巾に包んで、
杜松の樹の根元へ置いた。

キーウィット、キーウィット、何と、綺麗な鳥でしょう！」

こう歌うと、鳥は黄金の鎖を、お父さんの頸のうえへ落しました。その鎖はすっぽりと頸へかかって、お父さんによく似合いました。お父さんは家へ入って、

「ねえ！　とても美しい鳥だよ。そしてこんな奇麗な、黄金の鎖を、わたしにくれたよ。どうだい、立派じゃないか。」

といいましたが、おかみさんはもう胸が苦しくって堪らないので、部屋の中へぶっ倒れた拍子に、帽子が脱げてしまいました。すると鳥がまた歌い出しました。

「母さんが、わたしを殺した、」

「おお、」と母親は呻いた。「わたしは千丈もある地の底へでも入っていたい。あれを聞かされちゃア、とても堪らない。」

「父さんが、わたしを食べた、」

というと、おかみさんは、まるで死んだように、ばったりと倒れました。

「妹のマリちゃんが、」

「ああ、」とマリちゃんが言った。「わたしも行って見ましょう。鳥が何かくれるかどうだか、出て見るわ！」

そう言って、外へ出ました。

「わたしの骨をのこらず拾って、
手巾へ包んで、」

と言って、鳥は靴を妹の上へ落しました。

「杜松の樹の根元へ置いた。
キーウィット、キーウィット、何と、綺麗な鳥でしょう！」

と歌うと、マリちゃんも忽ち、軽い、楽しい気分になり、赤い靴を穿いて、踊りながら、家の中へ跳込んで来ました。

「ああ、」とマリちゃんが言った。「わたしは、戸外へ出るまでは、悲しかったが、もうすっかり胸が軽くなった！　あれは気前のいい鳥だわ、わたしに赤い靴をくれたりして。」

「いいえ、」といって、お母さんは跳ね起きると、髪の毛を焔のように逆立てながら、「世界が沈んで行くような気がする。気が軽くなるかどうだか、あたしも出て見ましょう。」

そう言って、扉口を出る拍子に、ドシーン！　と鳥が石臼を頭の上へ落したので、おかあさんはぺしゃんこに潰れてしまいました。その音をきいて、お父さんと娘が、内から跳出して見ると、扉の前には、一面に、煙と焔と火が立ちのぼって居ましたが、それが消えてしまうと、その跡に、小さな兄さんが立っていました。兄さんはお父さんとマリちゃんの手をとって、みんなそろって、喜び勇んで、家へ入り、食卓の前へ坐って、一しょに食事をいたしました。

青空文庫情報

底本：「グリム童話集」冨山房
　　1938（昭和13）年12月12日発行
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。
入力：大久保ゆう
校正：鈴木厚司
2005年4月1日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

杜松の樹

グリム

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　中島孤島訳
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/